

聞名仏教

第 150 号 毎月発行
(発行日) 2023 年 3 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈聞名の会〉 法話・座談
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

お詫びがでできるか 佐々木蓮磨

この尊い体験を得られた師は「私はかく動転せり」とか「わが昨非を語らしめよ」と叫んで数多くの同朋に告

多田鼎師は近代まれに見る

を受けたものでありました。

に襲われ、しばらくもいたた

げ、また多くの師友に語って

謹厳な修道者で、また自己を

とて、やがて師の恩寵

に陥られたので

批判を求められたのでありま

な方でありました。師は曾

観はこわれるときがきました。

ありました。ところが、その

す。ちようどそのころ、近角

て清沢満之先生の教えを受け、

それは自分に都合よく喜べる

とき不思議にも師の耳に大き

常観師は求道学舎を開いて、

先生が書かれた「絶対他力の

あいだは問題がなかったの

く響いてきた言葉は「わが名

おられたので、多田師はさつ

大道」という有名な文章の中

すが、人生の荒波は、なかな

か人間の都合を許しません。

そく求道学舎を訪ね、近角師

に「一色の映ずるも、一香の

たとい理屈では喜ぶべきこと

であると言ふ、口にも語つ

ります。

薫ずるも、決して色香そのも

が許さない場合が起こつてき

ます。

すると近角師は、多田師に

の力によるに非ず、みな彼

たとえば子供を亡くした場

自分の魂にまで響いてこなか

向かって「ではあなたは今後、

の一大不可思議の発動に基く

合などでも、はじめは「これ

のときばかりは大音宣布の

過去の誤りを如何にして償い

ものならずばあらず——我等

も仏のご催促である」と喜ん

となつて力強く響いてきた、

多田師は「今まで私の話を聞

は絶対的に他力の掌中にある

ではみませんが、二人三人と亡

くなつた場合には、なかなか

お詫びしてゆくつもりです」

ものなり」とある名句を深く

仏のご催促とは受けとれぬよ

うになり、ついには仏を恨み

と答えられると、近角師は言

信じ「恩寵の宗教」というこ

うになり、ついには仏を恨み

たいような心すら起るのであ

下に「あなたはお詫びができ

とを盛んに説いておられまし

た。

師が謹厳な態度で「われわれ

の生活は、なに一つとして

自分の力のできるものではな

い。すべては仏のお与えであ

る。いかなる場合においても

不足や小言を言うてはならぬ。

不足をいうことは、信のない

しるしである云々」と説かれ

ると、聞くものは師の真面目

な態度に打たれて、深い感銘

現代真宗問答 15

B 「真宗は南無阿弥陀仏一
つで助かる教えだといわれ
ますが、なぜですか」

A 「南無阿弥陀仏で助かる
という言い方もありますが、
〈聞其名号 信心歓喜〉と
無量寿経に説かれています
ように、〈名号を聞く〉とこ
ろに助かるといえましょう」

B 「ではなぜ南無阿弥陀仏
という本願の名号を聞くこ
所に救いがあるのですか」

A 「それは南無阿弥陀仏に
はアミダ仏の無碍光のはた
らきがあつて、それにであ
うからです。親鸞聖人は南
無阿弥陀仏という仏の名に
かけられている本願のはた
らきの面から南無阿弥陀仏
を帰命尽十方無碍光如来と
も名づけられました」

B 「そうすると帰命尽十方
無碍光如来の名のお心を聞
くことによって救われるの
ですね」

A 「ええそうです。帰命尽
十方無碍光如来のお心、そ

のはたらき、その仰せを聞
くのです」

B 「では帰命尽十方無碍光
如来のお心を聞かせてくだ
さい」

A 「このお心の要点を少し
述べさせていただきます。
まず帰命の帰は〈帰する〉
であり、〈よりかかる、より
たのむ〉という意味ですが、
命は命令ですから、帰命と
は〈帰せよの仰せ(命)〉で
す。〈よりかかれ、よりのた
め〉の仰せです。ありがた
い命令です。よりかかれ、
よりのたのめ、というのはマ
カセヨ、アテタヨリニセヨ
いうことです」

B 「何にマカセヨと仰せら
れるのですか」

A 「アミダ仏のお助けにマ
カセヨといわれるのです。
アミダ仏のことをここで尽
十方無碍光如来といわれる
のです」

B 「尽十方とは」

はたらきは東西南北、北東
北西の八方、上下の二方の
十方で、あらゆる世界にい
る衆生にいたり届いて、い
るということですよ」

B 「上下というのは」

A 「上は天上界から下は地
獄界にいたるまでというこ
とですよ」

A 「十方世界
を尽くして
尽く、とい
う意味でアミ
ダ仏の救いの

ど多く又深くとも、またそ
の者の行いの善悪がどのよ
うであろうとも、いわゆる
善人であろうが悪人である
うが、またその心が汚れて
いようと浄らかであろうと、
またその者が愚かであろう
と賢くであろうと、それらは
すべてアミダ仏のお助けの
妨げにも、また助けにもな
らない。またその者が仏法
を信じようが疑おうが、そ
れもお助けを妨げない。い
わんや、男であろうが女で
あろうが、若かろうが年寄
りであろうが、富者である
うが貧者であろうが、社会
的地位が高かろうが低かろ
うが、一切そうした条件に
よつてアミダ仏の救いはさ
またげられず、まるまる助
けたもう、引き受けたもう
アミダ仏の救済力の徳を無
碍光と表されています」

B 「如来とは」

A 「如来の〈如〉というの
は真実のさとり領域のこ
とで、この領域から迷いの
衆生の世界に現れ〈来〉て
くださった仏様という意味
で如来様といえます」

B 「アミダ仏はなぜ無碍の

徳をもつておられるので
すか」

A 「これについては、仏説
無量寿経の経説に説かれて
います。法蔵菩薩という菩
薩が一切の衆生を仏にした
いう広大な願いを起こし、
四十八通りの誓願を起して、
その誓願を永い菩薩の修行
を為すことによつて、一切
衆生をさわりなく救う力を
成就してくださつた、その
お徳を無碍ともうします」

B 「四十八願とは」

A 「一切衆生を平等に救う
べく起こされた四十八通り
の誓いで、その中心は第十
八願です。法蔵菩薩は一切
衆生を平等に救うにはどう
したらよいかを考え、衆生
をありべのままに引き受け
て救おうとされました。そ
の救済法はアミダ仏の名号
でもつて救おうとされるの
ですよ」

B 「アミダ仏の名号によつ
て、一切衆生を救おうとさ
れたのですね。では具体的
にどのようにアミダ仏の名
号で助けようと思われたの
ですか」

A 「それは第十八願に〈十

方衆生乃至十念若不生者不取正覺」と誓われて、これによって救おうとされま

す」
B「この誓いはどういう意味ですか」

A「阿弥陀仏の名を十声なりとも一声なりとも称えるばかりで助ける、というお誓いです。これは突き詰めればへ一声なりともナムアミダブツと称えるばかりで助ける」とい

う本願力を表されたのです。そしてこの誓いを法蔵菩薩は修行によつて成就して、そのようにはたらい

てくださるのです」
B「でも私たちが南無阿弥陀仏と一声称えても助かった感じがしないのはどうしてですか」
A「それはアミダ仏の丸だすけのお助けを、称えてい

る本人が自分の救いとして受け取っていないからです。お助けがあつてもそれが私

のためであつたと気がつかないとその人の上にお助け

は活性化しません。たとえば、豪華な宮殿の中にいてもそこで眠りこけていては豪華な宮殿の中にいる意味はないようなものです」

B「アミダ仏の広大な有難い救いをその者がへ知る」
A「ええそういっていい

でしよう。そのように感知する心のことを信心といいます。そしてその信心も私

たちは起こしようがないので、アミダ仏は私たちに信心までも与えようと誓い(至心 信樂 欲生我國)、この誓

いを成就して南無阿弥陀仏の言葉となつて私たちに喚びかけ、喚びさましてくださるので

す。その名号を聞くところにアミダの救いの有り難さを知らせてくださるので

すか」
B「名号を聞くとはどのようにお聞かせいただくのですか」
A「我が名を称えるばかり

で助ける」と聞くのです。第十八願のへ乃至十念若不

生者不取正覺」の誓いの大慈大悲心を聞くのです。へ称

えるばかりで助ける」とは称えている人にはへそのま

まなりで助ける、その外に何もいらぬ」といふ広大ななさを聞くことになり

ます」
B「名号を聞くにはどうしたらいいのですか」
A「名号を称えれば、すぐ

に耳に聞こえるでしょう。その一声にアミダの仰せを聞くのです」

B「なかなか聞こえませんが」
A「称えつつ、本願のお心を善知識から聴いたり、身

に引き当てて考えたりすることを繰り返すというのが実際の聞法ですが、縁が来てへああそうか、そうだったのか」と実感されます。

それはアミダ仏の大悲心が私の心に潜み入ってくださいからでしょう。アミダ仏の

大悲心が届いて私の上に信心となつてくださるので、ですからよく称え、よく聴くことが大事ですね」

B「では信心が起ればどうなるのでしょうか」

A「アミダ仏は私が気がつく前からすでに私と共にま

しまして私を撰め取つてくださつていたことを知ると共に、全ての人にも同じよ

うにアミダ仏がともにましますことが知られます。これが人生の根本の智慧となります」

B「アミダ仏と南無阿弥陀仏の御名とはどういう関係にありますか」
A「南無阿弥陀仏はへ助

からぬ者を助けるへタスケル」の仰せであると共に、アミダ仏ご自身の表れです」

B「私たちにとつて南無阿弥陀仏はアミダ仏の名とか仰せの言葉というだけではなく、アミダ仏ご自身なので

すね」
A「ええそうです。ですから南無阿弥陀仏の名号は仏ご自身ですから、アミダ

仏のお徳の全てが籠もつているといわれています」
B「アミダ仏の功徳が充満しているという事は南無阿弥陀仏はアミダ仏そのものということですね」

A「ええそうです。南無阿

弥陀仏の名に無量の功徳があるのは、法蔵菩薩が修行してその結果を南無阿弥陀

仏の名に施されたとも説かれてい

ます。ですから南無阿弥陀仏の名号にはアミダ

仏の全功徳が収まり、これをいただいた人の仏因になつてくださいます」

B「お説教で、南無阿弥陀仏の名号は法蔵菩薩が一切衆生を仏にしてやりたいと願

い、永き修行して、衆生が仏に成る因をすべて仕上げて、それを南無阿弥陀仏に撰めて、これを私たちに与え聞かせてくださり、へ汝

の往生の因の全てを仕上げたから、ソノママナリデ助ける」と仰せくださつてい

る、その仰せを聞いて、へあこんな私を助けて下さる」と聞き受けるばかりである、

と

言うお話をしばしば聞きますが、これでいいので

しょうか」

A「これについては、法然

聖人の『選択集』本願章に

南無阿弥陀仏の名号にはア

ミダ仏の全部のお徳が籠も

つて大善大功徳であると説かれています。宗祖も、

「この行は、すなわちこれ
もろもろの善法を撰し、も
ろもろの功徳を具せり。真
如一実の功徳の大宝海なり」
(行巻)

(行巻)

と仰せられていますので、

この名号を聞くばかりで助
かるといえます。ただ『選
択集』本願章にはさきほど
の「称えるばかりで助ける」
という誓いのお心がくわし
く説かれていて、名号の徳
ばかりでなく、名号を称え
る称名念仏を往生の行と誓
われた大慈大悲のお心を詳
しく説かれていて、このお
心が非常に大事です。です
からどちら大悲のお心と
して聞かせていただくのが
いいでしょう」

B 「称えるばかりで助ける
と聞く場合と大功徳の名号
一つで助けると聞く場合の
二つがあるように思われま
すが、それはどうなのでし
よか」

A 「称えるばかりで助ける
も、本願力の名号一つで助
けるの仰せも、アミダ仏が

「まるまる引き受ける、そ
のままなりで助ける」の仰
せにおさまります。「タスケ
ル」(タノメ)の仰せにおさ
まります」

B 「本願力の名号で助ける
というのはどういう仰せに
なりますか」

A 「汝の仏に成る因はすべ
て仕上げた、往生は弥陀が
引き受ける」という南無阿
弥陀仏の仰せになります」
B 「そうすると、(本願力の
名号で助ける)も(称えよ)
も同じ味わいになりますね」
A 「ええそうです。一声の
お念仏において、どちらも
味わえます」

B 「それなら(称えるばか
りで助ける)はなくてもい
いのではないですか」

A 「ええそういう見方もあ
り、称名念仏はご恩報謝の
念仏に限るという見方があ
ります。しかしそこは注
意を要します。宗祖は、

「法相の祖師、法位の云わ
く、諸仏はみな、徳を名に
施す、名を称するは、すな
わち徳を称するなり。徳、
よく罪を滅し福を生ず。名

もまたかくのごとし。もし
仏名を信ずれば、よく善を
生じ悪を滅すること、決定
して疑いなし。称名往生、
これ何の惑いあらんや、
(と)

という法位師の文を『行巻』
に引用しておられますが、
ただこれだけですと、アミ
ダ仏の仏名と諸仏の仏名と
の違いはそれほどないとい
えます」

B 「諸仏の名号でも助かる
という話にもなりませんね」

A 「ええですから、アミダ
仏の広大な大悲は、名号に
籠もる功徳だけでは充分表
現できません。そこで(我
が名を称えるばかりで助け
る)というアミダ仏の特別
な願である念佛往生の願の
お心がやはり非常に大事に
なります。このことについ
て法然聖人は『西方指南鈔』
で注意をしておられます。
ですから宗祖は『一念多念
文意』に、

「本願の文に、「乃至十念」
と、ちかいたまえり。すで
に「十念」とちかいたまえ
るにてしるべし、一念にか

ぎらずということ。いわ
んや「乃至」とちかいたま
えり、称名の遍数さだまら
ずということ。

この誓願は、すなわち易
往易行のみちをあらわし、
大慈大悲のきわまりなきこ
とをしめしたまうなり」

と仰せになり、乃至十念(十
声一声までの衆生、助ける)
という念仏往生の願には無
窮の慈悲が表されていると
いわれます (了)

【住職雑感】

隣りに住んでいる孫二人の受験
が終わった。一人は高校受験で、
志望校に合格したが、もう一人の
孫の大学受験は現在結果待ちであ
る。大学受験日の前日の夜、その
孫がきて、阿弥陀様にお参りした
といいつて入ってきた。日頃はな

かなかお参りをしないのが自発的
にきたので、嬉しかった。早速仏
間に入って、共にお勤めをした。
三誓偈をあげ、しばらくお念仏を
称えた。こういう場合、なにかし
ら自然に「どうか阿弥陀様受験に
うかりますように」とでもお願い
したくなる雰囲気を感じる。勤行
を終えて、孫がどういう気持ちで
手を合わせたかを思い測るが、分
からない。「どうか試験がうまく
いきますように」という願掛けの
ような気持ちではなからうかと、
つい思ってしまう。勤行は終わっ
たが、孫は黙っているの、「明
日の試験の時、問題をよく読んで
答えを書きなさい」とだけ注意を
して、外になにも言わなかった。
もし孫に言うとしたら、もう一言
「(阿弥陀様のみ心のままに)な
のであって合格祈願なんかするの
ではないよ」と言っておけば良か
ったかなとやや複雑な気持ちで終
わったことであった。

《念佛寺永代経法要》

四月二十二日。午後二時始(法要は午後のみ)

法話 題「煩惱の構造」

講師 大谷大学名誉教授 小谷信千代先生

小谷先生はインド仏教学の権威者です。